

高校検定教科書の「言語活動」について

大東 真理

Classroom Activities in High School English Textbooks

DAITO Mari

(Abstract)

This paper deals with language activities in authorized English textbooks written for Japanese high school students. It compares selected versions of the required subject “English Course I.”

Being a general language course, “English Course I” comprises reading and writing activities as well as speaking exercises and listening drills. This makes possible the sequencing of tasks, i.e., chaining of activities together to form a sequence. Task sequences can be designed according to the focus of a textbook. School textbooks for Japanese learners started focusing on communicative activities after the revision of the Course of Study in 1998. Thus, analysis is centered on sequences having various communicative goals.

1. はじめに

日本の学習者が、初めて教科としての英語に取り組むのは中学校においてで

あるが、教育改革の一環として平成14年度から全国の小、中学校および高等学校で総合的な学習の時間が実施されたことにより、今後は小学生が英語に親しむ機会も少しずつ増えるであろう。比較的早い時期から学校で英語の音声に触れ、外国語によるコミュニケーションの楽しさを体験する状況が今後生まれて来ると、それをどのようにしたら中学校・高等学校の英語学習に生かすことができるかが新たなテーマとなる。

さらに、今日のマルチメディア技術の進展によって、コンピュータを利用して「生きた」英語を教材として使うことや、オンラインでの異文化コミュニケーションのような新しい学習方法が、以前に比べてはるかに身近なものになった。学習者にとっては、このような環境の変化を有効に活用できる基礎的な力をつけることも、ますます重要になっている。

以上のような背景をふまえて本稿では、コミュニケーションの立場から見た教材研究を目的として、検定教科書に提示されている多様な「言語活動」の分析を行った。「言語活動」とは言語を用いた「聞く」「話す」「読む」「書く」の活動であるが、対象となるのは、学習した内容を実際に運用する活動（以下コミュニケーション活動）である。

2. 研究対象について

現在、高等学校で使われている教科書は、平成11年に改訂された学習指導要領に基づく新版であり、平成15年度より学年進行で順次導入されているものである。外国語科に属する現行の科目は、「オーラル・コミュニケーションⅠ」「オーラル・コミュニケーションⅡ」「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」「ライティング」の6科目である。必修科目に指定されているのは「オーラル・コミュニケーションⅠ」と「英語Ⅰ」で、あとの4科目は選択必修科目である。指導要領によれば、必修2科目のうちいずれかを履修した後、各学校の状況などに応じて選択必修科目を履修することになっている¹。2つの必修科目の違いは、「オーラル・コミュニケーションⅠ」が、英語を聞くことや話すことに重点を置いているのに対し、「英語Ⅰ」では「聞く」「話す」「読む」「書く」の4

技能を総合的に扱う点である。

そこで、4つの技能を組み合わせてコミュニケーション活動を行う場面の多い「英語 I」を材料とし、該当する複数の教科書を選んで分析を行った。使用教科書は、*Power On English I* (東京書籍)、*Genius English Course I* (大修館書店)、*MILESTONE English Course I* (啓林館)、*POLESTAR English Course I* (数研出版)、*Powwow ENGLISH COURSE I* (文英堂) の5種類である。

3. 分析の枠組み

「英語 I」のコミュニケーション活動は、本文の内容に関連した Q&A やドリル、さらにレッスンとレッスンの間に置かれた練習問題のページなどを使って行うよう編集されている。各々の活動は、重点の置き方、相互の関連性などにおいて、レッスン毎、また教科書毎に違いがあり、それぞれの特色が現れる部分であると言える。これらの活動を見る上で判断の基準としたのは、言語習得のために学習者が行う課題、すなわちタスク²の分類と、Nunan (1989: 119-122) の提唱する、連続性を持ったタスクの段階的配列の考え方である。なお本稿でタスクと言う時、Nunan における広義の task、すなわち “[...] a piece of classroom work which involves learners in comprehending, manipulating, producing or interacting in the target language while their attention is principally focused on meaning rather than form.”³を意味することとする。

一般に学習者がどれだけ多く目標言語を使って情報のやりとりをするかは、タスクの種類に左右されることが明らかになっている。すなわち、ある活動をその特徴により、双方向か一方向か、到達点が限定されているか限定されていないか、事前準備を伴うか伴わないか、などを基準にして分類した場合、いずれの場合も前者のタスクの方が発話の機会が多くなることが知られている⁴。

一方、マルチメディア教具などを利用した調べ学習やホームページ作成などを行うプロジェクト形式の活動においては、対話者同士の意見を一つにまとめなければならない収束タスクが常に効果的とは限らない。複数の異なった成果

が生まれる拡散タスクの特徴を生かすような構成を、学習内容に応じて工夫することも重要となる。

さらに、課題の配列については Nunan の次の考え方がある。すなわち、連続したタスクの内容が基礎的な段階から創造的な段階へと漸次進行すれば、学習者はある段階で身に付けた技能 (skill) を次の段階で利用しさらに発展させることができる。従って学習者が用いる英語の情報を簡略化し過ぎることなく、作業に向かわせることが可能である。これがタスクの段階的配列である。次に、連続したタスクについての Nunan の言説を引用する⁵。

Task continuity refers to the chaining of activities together to form a sequence, in which the successful completion of prior activities is a prerequisite for succeeding ones. Under this principle, activities are sequenced, not only according to their complexity as determined by input, learner and activity factors, but also by the logic of themes and learning pathways.

特に、どのようなタスクを選んで配列するかは、難易度だけでなくテーマや学習の道筋とも関連する、という上記の説を考慮して、分析を行うこととする。

4. 活動の目的から見たタスクの形式

5種類の「英語 I」の教科書に共通して使われているタスクについて、主なものを目的別に列挙すると、次のようになる。

ある事柄についての情報をまとめる、自分の考えを述べる、自分について説明する、意見を交換する、絵・写真・イラストを使って活動する。

このように、「英語 I」においては、自分の考えを相手に伝えることや、ある事柄について得た情報をまとめて発表することなど、コミュニケーションの目的に応じたタスクが使われていることが分かる。次に、それぞれのタスクにはどのような形式が認められるか、ということを考える。

事例1は、情報をまとめるタスクのひとつで、年表の完成を中心に組み立てられている。本文の内容に関する幾つかの年代を示し、対応した出来事に空所を設け、本文から適切な語を探して入れさせるものである。例えば、1887 People started killing the albatrosses of Torishima and exporting their () to Europe and America. という記述があり、空所には feathers を入れる。同時にこのレッスンの学習事項である「動詞+~ing」の表現を、started killing...and exporting を使って確認させている。

同じ種類のタスクと言えるものには、年代と出来事の両方に空所のあるもの、出来事を正しく並べかえさせるもの、本文の登場人物がインタビューを受けるという設定で要約を完成させるものなどがあつた。

事例1

本文：希少野生動物アホウドリの研究者、Dr. Hasegawa Hiroshi の
研究・保護活動。

言語活動：本文の内容をまとめる

練習問題：

Step 1 本文の出来事についての年表を完成する。空所に、適切な語を入れて、年表を完成させなさい。

Step 2 空欄を埋めて要約文を完成する。Step 1 の年表を参考にして、長谷川さんとアホウドリとの関わりを文章にまとめましょう。

Step 3 例を参考にして、自分についての年表を作りましょう。次に、それを文章にまとめましょう。

(MILESTONE English Course I. 啓林館. pp.76-77)

この事例の Step 1 は、本文の内容をひとつの資料にまとめることが目的である。出来事は年代順に並べられている。このような、答えの定まったタスクを使うことによって、基本事項または語彙などを確認することができる。さらに Step 2 では、同じ内容を文章にまとめる練習を行う。英文の一部を空欄にして、Hasegawa Hiroshi was born in a small village near Shizuoka in 1948.のような、比較的まとまった語句（下線部）を入れさせる。年表にはない出来事も含まれるので、学習者は繰り返し教科書本文に当たらねばならない。そして最後の Step 3 で、自分についてまとめた文章を書かせる。参考にする例は、ある中学生の書いた3つの出来事の年表と、それをもとに書いた英文5つからなる60語程度のパラグラフである。パラグラフの書き方は、年表の出来事をつなげながら、その時々自分の気持ちや考え方を書き加える方法をとらせている。このような場合、手本となるパラグラフだけでなく、考えや意図を伝える表現などが提示されていれば、ライティング活動の助けになるであろう。

次に引用するのは、特に自分について説明する文を学習するタスクである。この教科書では、本文を見開きの左ページに配置し、その内容や基本文型の確認を右ページで行う構成になっているが、タスクはこの確認問題の最後に次のような置換ドリルとして挿入されている。

事例 2

言語活動：自分の考えを述べる。自分について説明する。

練習問題：

下線部を入れかえて、あなた自身のことについて発表しましょう。

(対象文の下に置き換える語句の例)

I feel happy when I listen to my favorite CDs.

(my friends come to my house / I play computer games / I eat
ice cream)

I'm proud of our school because we have a strong baseball team.

(my sister, she knows a lot about Japanese history / our town, the people are very nice)

.....
I think that Hikaru is the best singer in Japan.

(Yasuko, swimmer in this class / *Kokoro*, Japanese novel / spring, season for hiking)

(*Power On English I*. 東京書籍. pp.11, 19, 43)

本文に続く練習問題の一部として、一貫したテーマのスピーキング活動を毎回行うことにより、学習者はレッスンが進むに従って、使える表現の種類を増やして行くことができる。ただし、文構造についてはそのページで学習する基本文型のうちの1つと類似したものという制約がある。すなわち、3つ目の I think that Hikaru is the best singer in Japan. は本文の Did you know that many hot-air balloon festivals are also held in Japan each year? に対応し、このページで学習する基本文型「S + V + O (that 節)」に含まれている。

このように、文の構造が決まっていて、タスクと言うよりもドリルに近い練習であっても、そこで学習した内容を、例えば E メールをやりとりする場面などで実際に使うことができれば、更に幅広い言語活動につながり得る。

加えて、目標言語によるインタラクション⁶、すなわち相互交流が行われることも、タスクの重要な要素であるとされる。事例3は、意見を交換する目的の言語活動で、Step 1 から Step 4 の中に、個人の活動とグループの活動とを組み合わせて配置している。

事例 3

言語活動：意見を交換する

場面設定：あなたは自由な時間にどんなことをしますか。友達にも聞いて比べてみよう。

練習問題：

Step 1 英語を聞いて、自分の自由時間の過ごし方と比べてみよう。

Step 2 表を完成する。

①あなたは次の表にあることをしますか。“1 You”の欄に記号で答えよう (◎=often, ○=sometimes, △=rarely, ×=never)。

	1 You	2	3
Watch the news			
Sing in the bath			
...			

②自分の自由時間の過ごし方について、①の表をもとに書いてみよう。

③2人の友達に①の表の質問をして、その結果を2と3の欄に記号で記入しよう。

Step 3 例を参考に、自由な時間の過ごし方について、友達と話し合ってみよう。

例 A: What do you do in your free time?

B: Free time? I never have free time because I always have

to do something: study, help my mother, take piano lessons.

A: I see. So you never have fun...

B: That's not true. For example, ...I sometimes go shopping.

That's fun. How about you?

A: I have lots of free time. I always play video games.

...

Step 4 自由時間の過ごし方についてグループで発表し合い、次にクラスで発表しよう。

- ①グループになって、お互いに自分の自由時間の過ごし方について発表しよう。
- ②グループごとに結果をまとめ、クラスで発表しよう。
- ③別のグループの発表を聞いて質問しよう。
- ④結果をまとめて掲示しよう。

(Genius English Course I. 大修館書店. pp.90-91)

この言語活動のテーマは、Do you have fun in your free time? である。個人が行う作業という観点で見ると、まず生徒は、テーマに沿って自分の自由時間の過ごし方についてまとめ、次に2人の友達にインタビューをする。さらにグループ内の発表を経てクラス発表へと進む。また同じ活動を、授業の中で行われる学習者同士のインタラクションという別の観点で見ると、冒頭の個人活動(Step 2の①、②)については、テープの内容や表の質問を相手にした学習である。続いてStep 2の③に進んだとき、インタビューの相手と本当のペア活動を行うことになる。与えられている質問は4問であるが、これに生徒自身が聞きたいことを加えてもよいだろう。

Step 3のインタラクションでは、単に友達の自由時間の過ごし方を聞くので

はなく、自分の時間の過ごし方についてどう思うかを伝え合う活動になっている。また、この対話の際に使うと便利な表現がページの最後に提示されている。Step 4 のグループ活動は、ここまでの学習の確認として使うことも、更に発展的な相互交流につなげることもでき、クラスの状況に応じた活動を工夫する部分ではないかと思われる。発展的な活動を行う例としては、クラスのホームページに結果を載せるというようなことも考えられる。

5. レッスン本文との関係から見たタスクの配列

前節の事例3では、個人で行う作業からグループ活動へと進む言語活動について考えた。このような練習問題の構成は、Nunan の言う連続したタスクの段階的配列のひとつであると言える。なぜなら、やり取りされる英語の難易度に変化がなくても、インタラクションの形態を変えることで、より発展的なコミュニケーション活動につなげていると見るができるからである。本節ではこのようなタスク配列について、さらにレッスン本文との関係からも検討して行く。

通常各レッスンには、1 ページ100から150語程度の本文が3 から6 ページ収録され、各ページに内容確認の質問などが配置される。対象とした教科書のうち、英語で質問するものは3種類、日本語は2種類であった。ここで、質問に答える Q&A の部分を、本文を読むための補助的な作業と捉えるのではなく、後に続くコミュニケーション活動の導入、すなわちプレタスク⁷とみなした時、これをタスクの段階的配列の一部と考えることができるのではないか。すなわち、レッスン本文との関係から見ると、個々のドリルや練習問題にも段階的配列が認められるということである。

事例4では、各ページに Q&A があり、場面の最後には言語の働き⁸に関するドリルが入っている。言語の働きとは、言語が使用される具体的な場面において、

人との関係を円滑にする。気持ちを伝える。情報を伝える。考えや意図を伝える。相手の行動を促す。

というような、言語が果たす機能、役割のことで、改訂された指導要領にはそれぞれの具体例が示してある。このタイプのコミュニケーション活動は新版の教科書の大きな特徴のひとつで、この事例の教科書を含めて3種類に取り入れられていた。

事例 4

場面 1 : 学校で美保が Eric を映画に誘う

本文 : Eric: Hi, Miho.

Miho: Oh, Eric! ... I've got two free movie tickets for the ABC Cinema. Would you like to go to see something?

Eric: Thank you. When do you plan to go?

Miho: Next Saturday, if that's OK with you.

Eric: ... I'm afraid I can't. I'm going to visit a friend that day.

Miho: Well, how about Sunday, then?

...

Eric: That's fine with me.

Q & A : ①美保は Eric を何に誘っていますか。

②Eric の今度の土曜日の予定はどうなっていますか。

本文 : Miho: And why don't we have something to eat first?

Eric: Yes, let's.

...

Q & A : ①(始業の) ベルが鳴るまでに決まったことは何ですか。

②計画の続きは、どのようにして決めることになりましたか。

ドリル 1 : ①本文中の「～ませんか」の文を探す。

②本文中の「～する予定だ」「～するつもりだ」の文を探す。

③ペア活動。Why don't we go shopping this weekend? に対する断りの表現と、断られたときの答えを練習する。次に下線部を変えて会話する。

場面 2 : 美保から日曜日の計画の続きが E-mail でとどく

本文 : Hi, Eric.

I'm glad you can come on Sunday.

There are four movies at the ABC Cinema that afternoon. Let's try to pick one we'll both enjoy. I'm interested in *Lost Star*. ...

If you prefer to see a different movie, please tell me. *Lost Star* is just a suggestion. Could you write me back after you think it over?

I'm really looking forward to seeing you on Sunday.

Miho

Q & A : 美保が自分の見たい映画を Eric に押しつけているのではない

とわかる文はどれですか。

本文： Hi, Miho.

Thanks for your e-mail. *Lost Star* sounds perfect. I really enjoy science fiction movies. I'll be in front of the Central Bus Terminal at 12:35, as you suggested.

See you on Sunday!

Eric

(英語による映画の上映一覧とバスの時刻表)

- Q & A: ①待ち合わせの時刻は何時になりましたか。
②2人はどの映画を見ることになりましたか。
③2人が映画終了後すぐに帰るとすると何時のバスに乗れますか。

ドリル2:本文中の「～しませんか」の表現と映画の上映一覧を参考にして、美保に「他の映画を見ませんか」という E-mail を出す。

(POLESTAR English Course I. 数研出版. pp.33-37)

事例の中で扱われているのは、場面1、2ともに「人を誘う」「人に依頼する」「自分の意図や予定を伝える」という言語の働きに関する活動である。場面1のタスクを順に見て行くと、まず脚注式の Q&A 問題に英語で答えることで、基本文型の練習を行う。続くドリル1の③で、与えられた中から任意の表現を選んでスピーキング活動を行う。その会話は、AがBを誘いBが断るというもので、展開の決まった、閉じたタスク⁹である。

これに対して、場面2のドリル2とその直前の活動は、本文に関係のあるコミュニケーション活動の最後の部分であり、それまでの内容を受けて更に発展させる活動例と言える。すなわち、帰りのバスを調べる Q&A の③を行うためには、2人の見る映画を知った上で、終了時刻と乗れるバスを特定する必要がある。これを英語によるペア活動として行えば、目標言語による情報交換タスクになる。また個人で行う場合には、英語の資料から必要な情報を読み取るリーディング活動になる。さらにドリル2では、英文の一部を空欄にし、そこを自分のことばで埋める形式の *guided writing*¹⁰ を行わせている。生徒は Eric になり、自分の選んだ映画を Miho に勧める E-mail を作成する。ここでも直前のタスクで使用した資料を再び使うことから、既習の事項を次の作業のために利用する配列となっていることが分かる。書く内容について、*How about ~ing ...?* のような、人を誘う文に、もう1文添えるよう指示があるので、例えば *I'm interested in comedies because....* (理由を述べる) / *I'm sure that you'll like it, too.* (自分の確信を述べる) などの表現と組み合わせて使ってみることもできる。このように、全くの自由作文でなくとも、緩い制限のあるタスクを工夫することで学習者の創意を取り入れることができると思われる。

以上のような観点で見た結果、事例4以外の教科書においても類似したタスク配列が認められた。

6. おわりに

本稿では、新学習指導要領に基づく教科書の研究として、高等学校の英語教科書の分析を行った。対象としたのは、改訂の要点として注目されている、実践的なコミュニケーション能力を養うための言語活動である。

授業の中で教師と生徒が行う全ての作業を言語活動というが、特にコミュニケーションの観点からそれらを見る基準として、タスクの考え方をを用いた。さらに、ドリルのような基礎的活動も、発展的活動へつながる段階的配列の部分として捉える *task continuity* の視点を加えた。

分析の結果、検定教科書のような、盛り込まれる内容の枠が定まった教材で

あっても、個々のタスクの特徴を踏まえ効果的に配列することで、コミュニケーションに役立つ練習を行わせることができることが明らかになった。

今後はより多くのコミュニケーション活動を研究すると同時に、マルチメディアを使ったオンラインでの異文化コミュニケーションのような、学習環境の変化に対応する教材の活用についても考えて行きたい。

(注)

1. 文部省 (1999) 『高等学校学習指導要領解説：外国語編』 開隆堂, 13-15.
2. 効果的なタスクの特徴は、到達点 (goal) が明確であり、タスク完了のために情報交換を必要とし、実際のコミュニケーションと同じあるいは類似した作業であること、などが挙げられる。
3. David Nunan, *Designing Tasks for the Communicative Classroom* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989) 10.
4. Pica, T. et al., Choosing and using communicative tasks for second language instruction. in Crookes, G. and Gass, S., eds. *Tasks and Language Learning: Integrating Theory and Practice*. (Clevedon, Eng.: Multilingual Matters, 1993) 9-34.
5. David Nunan, *Designing Tasks for the Communicative Classroom* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989) 119.
6. インタラクション (相互交流) とは、言葉を通してメッセージを伝え合う双方向の言語活動である。言語習得において大きな役割を果たすと考えられている。
7. プレタスクでは事前に役に立つ単語やフレーズを提示し、学習者がタスクについて理解したり準備したりするのを助ける。
8. 言語の働きは、高等学校においても、中学校に引き続き指導すべき内容として、指導要領に示されている。例としては、紹介する、感謝する、説明する、主張する、依頼する、などが挙げられている。(文部省『高等学校学習指導要領解説：外国語編』 開隆堂, 1999: 79-81)

9. 閉じたタスクは、到達点または解決方法が限定されているタスクである。これに比べ、開いたタスクでは、到達点または正解が1つに限定されていない。
10. ライティング活動の一種。例としては、与えられた英文の下線部を書き換えたり、空欄を埋めたりする。対話文の一方の発言部分を空欄にして自由に書かせることもできる。入れさせる語句を工夫することで、開いたタスクにもなる。

[参考文献]

- Nunan, D. (1989) *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rivers, W., ed. (1987) *Interactive Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ジェーン・ウィリス (著) 青木昭六 (監訳) (2003) 『タスクが開く新しい英語教育』開隆堂. Trans. of *A Framework for Task-Based Learning*. Addison Wesley Longman Limited: Harlow, 1996.
- 「どうなる高校教科書」『新英語教育』7月号 2002.
- 文部省 (1999) 『中学校学習指導要領解説：外国語編』東京書籍.

[使用教科書]

- Power On English I*. 東京書籍, 2003.
- Genius English Course I*. 大修館書店, 2003.
- MILESTONE English Course I*. 啓林館, 2002.
- POLESTAR English Course I*. 数研出版, 2003.
- Powwow ENGLISH COURSE I*. 文英堂, 2003.